

氏名	ながい たかし 永井 貴士
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学位の種類	博士（作業療法学）
学位記番号	健博 第218号
学位授与の日付	令和3年9月30日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	Development of the final version of the occupational adaptation questionnaire for family caregivers 最終版「家族介護者の作業適応質問紙」の開発
	主査 教授 谷村 厚子
	委員 准教授 浅川 康吉
	委員 准教授 小林 隆司
	委員 石井 良和

【論文の内容の要旨】

【はじめに】

我が国の高齢者人口は増加の一途を辿り、高齢者福祉への対策は世界からも注目を集めている。中でも高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的に2025年から地域包括ケアシステムを構築する。この政策の導入に家族介護者の介護力は重要な役割を担う。しかし、すでに家族介護者のおかれている状況は深刻で、介護殺人や介護心中といった社会問題に発展している。このような現状を改善するためには、家族介護者に対する社会的支援体制が必要である。作業療法士（以下；OTR）は人の作業（日常生活活動・仕事・余暇）に着目し、作業適応のために支援する専門的能力があるため、家族介護者への支援に有能になれる。OTRが家族介護者への支援を行うために、家族介護者の作業適応質問紙（OAQC）を開発し、その信頼性と妥当性を検証することが本研究の目的である。

【方法】

在宅で要介護者を1ヶ月以上介護している家族介護者を対象とした。研究協力施設の利用者の家族介護者に調査票を配布してもらった。調査票には、フェイスシートや先行研究（副論文1・2）で作成された尺度（41項目）などが含まれる。返送されたデータからアンケートの各項目の平均値、天井（床）効果の算出や、探索的因子分析（EFA）や項目反応理論にて分析した。

【結果】

本研究では、平均年齢 65.6 ± 12.6 歳の男性 51 名、女性 159 名、不明者 6 名を含む 216 名の家族介護者が回答した。介護年数は平均 5.54 ± 4.94 年でした。要介護者の疾病で最も多かったのは脳卒中、次いで高齢による虚弱、そして認知症であり、これで全体の 8 割を占めた。

項目分析では、各項目の天井効果と床効果が範囲外であったのは 5 項目あった。ポリシリアル相関係数が 0.4 以下であったのは 19 項目であった。41 項目から 24 項目が削除され、17 項目が適応された。

構成概念妥当性については、1 項目が因子負荷量が 0.4 以下であり削除された。16 項目による EFA から「思いやる気持ち (2 項目)」、「生活のバランス (7 項目)」、「介護意識 (3 項目)」、「社会的存在価値 (2 項目)」、「自分の健康 (2 項目)」の 5 因子が構成された。また適合度指標では良好な適合を示した。さらに ω 係数は 0.929 であり内の一貫性が担保された。

項目反応理論では、全体として OAQC の 16 項目は、満足な項目応答を示し、適切な識別力と難易度を提供することが示された。OAQC に関連するテスト応答関数とテスト情報関数から、広範囲の作業適応状態を高精度で測定した。

【考察】

OAQC を開発し、家族介護者を OT の専門的視点で評価できるよう検討した。全体として信頼性と妥当性は満足いくものであった。EFA によって評価された構成概念妥当性は 5 つの因子からなる 16 項目で許容された。適合度はとても良好な数値を示した。このことから家族介護者から得るデータに適合することを証明する。また ω 係数から内部一貫性が証明され、高い信頼性が認められた。さらに項目反応理論により、OAQC スコアは高い項目応答を持つことが証明された。

これらのことから、家族介護者の作業適応を適切に測定することができると判断する。今後、家族介護者への支援に役立つ可能性があると考えられる。